Infinite Stratos 00

キラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓ　００

【Ｎコード】
Ｎ４９１３Ｚ

【作者名】
キラー

【あらすじ】
突然起こってしまった首都直下地震によって『彼』は死んでしまった。
だが、それでも生きていたかった。どんなに醜くても、死ぬのがイヤだった。まだ何も成し遂げていないのに、死ぬのは……！
その思いに神が応えてくれたのか、『彼』は2度目の人生を生きることになった。……『インフィニット・ストラトス』の世界で、主人公・織斑一夏として。

そして、織斑一夏となった『彼』はとある天才科学者と同じ理由で他人を嫌っている少女、篠ノ之束が発案した計画に参加することになった。……人類を、変革へ導くための。

００ープロローグ（前書き）

この小説は、先ほど間違えて短編小説として投稿してしまった同名小説を連載小説として再投稿したものです。先ほどは間違えて投稿してしまい、すいませんでした。

00　プロローグ

……今日は何か嫌な予感がする。

そんなアホなことを感じながら俺は都市部にある大型の本屋に行く。え、俺の名前？　ただのしがない高校2年生だ。でもちゃんと名前はある。趣味はネットサーフィン、ゲーム、ラノベを読むこと、好きなアニメはたくさんあるが、ガンダムシリーズが好き。特に00シリーズ。好きなキャラは刹那・F・セイエイ。得意な科目は社会だ。ちなみに社会の中でも歴史が1番得意。

別に買うものは特に無かったけど、友達に進められたラノベ、『IS＜インフィニット・ストラトス＞』の1巻をラノベの販売エリアで見かけた。

友達からの評価は、『とにかくヒロインが可愛い！！』……だそうだ。何の参考にもならない……。

それでも読んでから読み続けるかを決めるか。

そう思った俺は特設売り場が形成されているところからISの1巻を手に取り、レジに……向かわなかった。その前にゲームの攻略本を見ていくことにしたんだ。なお、漫画は先週買ったばっかりだったから見ないことにした。

ざっと見て、特に欲しいものはなし。ゲームの攻略本はネットのｗｉｋｉがあるから買わなくても問題は無いしな。

「そんじゃ、レジに行くか」

なんとなく呟いてみた。どうせまた来れるしそろそろお暇（いとま）するか。そう思っていたから。

けど、もうこの日常に戻れないなんてこのときは思っていなかった。

本屋を出て数分、俺はＩＳの１巻を歩きながら読んでいた。
これが意外と面白く、帰ったらＩＳのアニメを某サイトで見るかとも思えた。それくらい俺には面白く思えたんだ。
そんなときだった。
地面が小刻みに揺れ始めた――――地震だ！　それも、揺れ方がどんどん大きくなってきている。……もしかして、ニュースでやっていた首都直下地震が起こっているのか！？　けど、前の震災で東京が揺れたときよりも、少し大きく揺れている感じがする。……それでも震度は７～８度だろうな。
周囲は騒ぎも同然、パニック状態になっている。

「嫌な予感、ってこれのことだったのか……！」

後悔したけど、もう遅い。俺はとにかく自分のできることを考えようとした。そのとき、上のほうで、ギシリ、と何かが鈍く動く音がした。
上を見てみると、未完成のビルの鉄骨――おそらく、最小の物だろう――が地震の影響で揺れて、こっちまで落ちてきている！
周囲もすぐに気がついて、もう離れている。
だが、俺は逃げ遅れた。
だって、逃げようと思ったときには鉄骨がいくつもすぐ近くまで落ちてきていたから……。
こうして、俺は死に絶えようとしていた。体中に走る激しい痛みとともに――。

そして、死ぬ前に思ったこと。
――俺はまだ、生きていたい！！
生きることへの、渇望だけだった。

真っ暗な世界に俺はいた。
それに気がついたが、そんなことはどうでもよかった。もう死ぬんだろう……だからこの世界に俺の身を委ねよう。
――俺が望んだことは何だった？
ふいに、そんなことが俺の脳裏に過ぎった。
……そうだ。俺が望んだこと。
――俺はまだ生きていたい！！
まだ、俺は死にたくないんだ……！
俺の望みが叶ったのか、漆黒の闇に覆われていた世界に光が灯った。やがてその光は闇を全て消し去り、俺を生に導いた。
そして、俺の目に映ったのは、どこにでもありそうな町の景色だった。
……どうも身体が小さいような気がした俺は視線を下にやる。見えたものは、毛布に包まっていた肌が少し浅黒い赤ん坊の身体――どうやら俺は、赤ん坊になったらしい……。
それにしても喋り方も若干おかしいような……まあいい。
で、わかる状況は1つ。……俺は生みの親に捨てられたようだ。
捨て子に転生――憑依か？――した俺はどうやって生きていけばいいんだ？　確かに生きることは望んだが、こんな状況にしろとは頼んでないぞ。
しかも、今は雨が降っていて、とても寒い。赤ん坊のこの身体じゃ凍死する可能性がある……！

と、そのとき俺の目の前をビニール傘を持って歩いていた黒髪の少女と俺の視線が交わる。……ん？　あの少女、どこかで見た気が……。

そんなときに、彼女は俺に近づいてきた。

「どうしたの？　何でこんなところにいるの？」

黒髪の少女は俺に微笑みかけながら聞いてきた。親に捨てられたらしい、そう言いたかったけど今は赤ん坊の身体だから喋れない。そこに、黒髪の少女の友達と思われる少女も傘をさしてやってくる。

「ちーちゃんどうしたの？」
「あ、束。この子、捨てられたみたいなんだ。かわいそうで……」
「ならお父さんに相談してこの赤ちゃんを引き取る？」
「そうしようよ！　この子、なんだか両親に捨てられたときの私みたいで……見てられなかったんだ」

……この子も、両親に捨てられたのか。俺も生前は両親に捨てられて、それでも必死に生きてきた。でも、俺は誰にも助けてもらえなかったけど、この子は束って子の両親に助けてもらったみたいだな。

すると、黒髪の少女が俺を抱き上げて、

「じゃあ行こうよ束！」
「はーい。それでこの子の名前はどうするの？　名前無いみたいだからつけてあげないと」
「そうだなぁ……じゃあ、一夏っていう名前はどうかな？」
「ちーちゃんのつけた名前なら何でも良いよ。よろしくね、いっくん！」

「じゃあ決まり！　きみの名前は一夏、織斑一夏だよ。よろしくね。私の名前は織斑千冬。こっちは篠ノ之束！」

自己紹介をしながら黒髪の少女、千冬は俺に笑いかけてきた。

そこで俺は気づいた。織斑千冬と篠ノ之束はＩＳの登場人物……そして一夏、というのは主人公の名前だったはずだ。……もしかして俺は、織斑一夏に転生したのか！？

……こうして、織斑一夏（おれ）の新たな人生はスタートした。

００―プロローグ（後書き）

誤字脱字、おかしいところがあれば報告をお願いします。それと、よければ感想を下さると作者は嬉しいです。

別のユーザネームで投稿している遊戯王の小説は、内容の構成が思ったよりも難しくなってしまい、早くてもクリスマス前後に投稿することになります。ご了承ください。

０１ー入学と再開（前書き）

どうも。

それにしても、刹那のような性格を巧く表現できたか不安です。刹那のような性格のキャラの表現は苦手なので……。

――確か、昔のことだった。

姉さんの親友で俺の幼馴染の姉、篠ノ之束に見せてもらった開発中のマルチ・フォーム・スーツの設計図を見せてもらったときだっただろうか。

束は真剣な表情をしながら俺、織斑一夏に自分の計画を打ち明けた。もちろん、計画の内容は他人には秘密だが。内容は――――俺が知っている男……人間を嫌っていながらも、人間のために行動を起こし、未来に希望を与えた科学者の計画によく似ていた。

その計画には姉さんも参加していると聞いた。それに……俺は憑依した影響か、当時には刹那・F・セイエイと似た思考回路を持っていた。

だからだろうか。束の計画に賛同し、参加しようと思ったのは。

計画に参加した俺は、束にある物の提案書を手渡した。それは、俺が憑依前に『こんなの作りたいな』と思った、GNドライヴだった。

束はGNドライヴに必要なTD（トポロジカルディフェクト）ブランケットを木星の高重力下ではなく地上で作成することに成功し、コアナンバー0という名称で完成させた。

そして束がマルチ・フォーム・スーツ、インフィニット・ストラトスを世界の表舞台に出して数週間後、世界はある種の変革を迎えた。

正しいように見えて、実は歪んでいる世界へと。

……気がつけば、2度目の高校1年初日の朝を迎えていた。

「夢、だったのか……」

俺は、『とある計画』の立案者である束の威光により、本来は女性しか使用することができないマルチ・フォーム・スーツ、『インフィニット・ストラトス』……通称ISを動かせる唯一の男子としてIS学園と呼ばれる国立の高等学校（種類としては高等専修学校だ）に通学することになった。

IS学園には姉さん、織斑千冬が教師として所属しているため特に問題は無いと思われるが。

ちなみに、今俺が居るのはIS学園が終点となっているモノレールの中だ。東京湾の上に作られた全長約4キロにも及ぶメガフロートの上に建造された大型の公立の高等学校、IS学園が俺の目的地だ。……さっきも言ったが、気にしないでもらいたい。

束が開発した携帯端末を開き、時間を確認する。今は8：23……姉さんには8時半までに校門の前に来い、そう言われているから大丈夫だろうな。

そう思っていると、モノレール内にアナウンスが掛かる。

『終点、IS学園前に止まります。お降りの方は、お荷物のお忘れに気をつけてください。繰り返します――』

もう到着か……。そう思った俺はワンショルダーバッグを肩に掛けて降りる準備をする。

モノレールが停止して、ドアが自動で開く。

俺は改札口を出て、IS学園に向かうように歩く。通学路の途中には洒落たカフェやブランドショップが幾つか並んでいた。もっと

も、俺はそんなものに興味はないが。
それから5分過ぎて、ギリギリだが俺はＩＳ学園の校門に到着した。
校門には黒のスーツに同色のタイトスカートを着用した姉さんが居た。どうやら俺を待っていたらしい。

「姉さん」
「遅いぞ一夏。来るならもう少し早く来い」
「了解。……遅くなったことは、すまなかった」

俺は頭を下げて姉さんに謝罪する。

「冗談だ。お前はお前のペースを守ればそれでいい。後、校内では織斑先生と呼べ。いくら義姉弟（きょうだい）だからといって、公私は使い分けるべきだ」
「了解した、織斑先生」
「それでいい。……それと、お前のＩＳだが、近日中には束が送ってくるらしい」
「そうか……」
「それでは教室に行くぞ。ついて来い」

そう言われた俺は束が送ってくるＩＳのことを考えるのを止めて、姉さん……織斑先生についていく。
ＩＳの詳細について聞きたがったが、政府やどこかの秘密機関が監視しているかもしれない、そう思った俺は何も聞かないことにした。
教室までの道中、織斑先生には「高校生活中はあまり計画のことは考えずに過ごせ。義弟（おとうと）に高校卒業くらいはさせてやりたいからな」と言われた。……急にそんなことを言われた俺は内心恥ずかしかった。

１年１組では副担任である山田真耶の号令で自己紹介を行っていた。それは、クラスの誰もが行っていたことで、篠ノ之箒も同様だった。もっとも、名前と趣味を簡単に言っただけだが。

だが、今の彼女にはそんなことはどうでもよかった。

箒は窓側の最前列の席から、教卓の前にある誰も座っていないデスクに眼を向けていた。

その席は、ニュースでも大々的に公表されていた世界で唯一ＩＳを使用することができる男子、織斑一夏が座るはずの席だった。だが今、一夏はいない。

(何をやっているのだ、あいつは！)

箒は内心イラだっていた。理由は簡単。一夏に逢いたかったからだ。

箒が小学生の頃、剣道をやっていて男勝りな性格、たったそれだけの理由で気が強いだけの男子１０人くらいからいじめられていた。それを一夏は止めてくれたのだ。いじめは何度も続いたが、小学２年生の３学期にはそれは終わっていた。

何度も助けてくれた一夏に対して、箒は『どうして自分なんかを助けたんだ』……そう問うた。

そして、一夏の答えは、

「……人を助けるのに、理由は要らない。俺はお前を助けたかった。それだけだ」

それだけのたったシンプルな理由。だが、そこに惚れたのかもしれない。
結論：箒は一夏のことが好きだから早く逢いたいのだ。
自己紹介が終わるのと同時に、教室の扉が開いた。入ってきたのは……
(千冬さん……？　そういえば、ＩＳ学園の教師をやっていると聞いていたな)
入ってきたのは千冬だった。
それに気がついた真耶が千冬に話しかける。
「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」
「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」
「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」
真耶の若干不安だった声色も千冬が来てからは元の調子に戻っていた。
「諸君、私が織斑千冬だ。きみたち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。できない者にはできるまで指導してやる。逆らっても良いが、私の言うことはちゃんと聞け。いいな、小娘共」
瞬間、クラスのほとんどの女子から黄色い歓声が上がった。それを聞いて千冬は頭を抱える。
……それも収まり、必要なことをクラスに伝えた千冬は、廊下に映るウェーブの掛かった黒髪の少年をチラリと見て、

「で、だ。お前たちも知っていると思うが、このクラスに世界で唯一ＩＳを使える男子が入ってくる。入って来い、織斑」
「了解した」
　織斑、という苗字に反応して箒はガラリと開いたドアのほうに視線を向ける。
　ドアを開けた張本人は教卓の隣まで歩き、教室全体を見渡す。
　彼の容姿は、中東人のような若干浅黒い肌にウェーブの掛かった漆黒の髪、そして１５歳とは思えないほど整っている容姿……まるでアニメの主人公のような顔立ちをしていた。もちろんＩＳ学園の制服は着用しているが、ブレザーが主にカスタマイズされていて、メインカラーが青系になっている。
　そして、彼……織斑一夏は千冬に自己紹介を促される前に、
「俺の名前は織斑一夏。このクラスの担任の織斑千冬の義弟で、世界でＩＳを操縦できる唯一の男だ。あまり愛想はよくないが、皆とは仲良くしたいと思っている。これから1年、よろしく頼む」
　自己紹介を済ませて、一夏は少しだけ微笑む。それを見て、女子は一夏に対して好印象を持ったようだ。
　若干ザワザワしている教室を見渡した後、千冬は手を叩きながら号令をかける。
「静かに！　この後はＩＳの基礎理論の授業だ。早めに準備をしておくように！」
　そして、騒がしいＳＨＲ（ショートホームルーム）が終了した。

何だかんだで1時間目の授業も終わり、俺は授業に使っていたテキストをバッグに仕舞った。
それから本を読もうと思ったが……やめた。理由は、教室内から降り注ぐ視線の雨が原因だ。ちなみに教室の外からも視線を感じる。
それにしても、6年ぶりだろうか、箒と顔を合わせるのは。
もう最後に逢ってからずいぶん時間が経ったな。今でも剣道を続けているのか？
数々の疑問が脳裏に過ぎったところで、俺は突然話しかけられた。

「ちょっといいか」
「……篠ノ之箒」

突然話しかけられるとは思っていなかった。だが、こちらから話しかけようと思っていたからそれはそれで好都合だ。

「了解した。場所は屋上で構わないな？」
「あ、ああ。そこでいい」

それだけ言葉を交わして、屋上へ向かうために廊下に出て、階段を昇る。
到着した屋上は普通の高校と異なり、屋上が基本は解放されている。中心にはいろんな種類の花が下段に植えられていて、屋上から見る海は綺麗だ。
俺と箒はフェンスの前に立ち、俺はフェンスに寄りかかる。

「箒、久しぶりだな。もう6年も経つのか？」
「そうだな。久しぶりに会えて嬉しいぞ、一夏」

「俺もだ。……それにしても髪形は変えてないんだな。お陰ですぐに箒だとわかった」
「そ、そうかっ？」
俺が微笑みながら言うと、箒は頬を若干染めて応える。……風邪か？　それとも緊張しているのか？　おそらく後者だろうが。
「それで、用は何だ？」
「う、うむ……その、だなっ」
用件を言おうとしているところで、箒は顔を再び赤くしながら口ごもる。
普通に喋ればいいと思うんだが……まあいいか。
「それにしても、インターネットで見たが、剣道の全国大会で優勝したようだな。おめでとう、箒。嬉しかった。俺の幼馴染が優勝するとは……箒の幼馴染としては自慢できるよ」
「そうか、一夏、ありがとう」
「ああ。……それで、『計画』のことは誰にも言っていないな？」
「大丈夫だ。計画に賛同するわけじゃないが、人に話せる内容じゃないからな」
「そうか。それならいい。それと……」
「？」
いきなり俺が台詞を止めたことで箒はそれに疑問を持ったようだ。突然言葉を切ったからな……次からは気をつけるとしよう。
そして俺は、箒に対面したときに思ったことをさらけ出す。
「俺は、また箒に再会できてよかったと思う」
「私もだ。また一夏に出逢えるとは思ってもみなかった」

それで、俺が口を開き箒が優勝した剣道の全国大会に話を変えようとする。そう思った矢先、校内にいくつもつけられている灰色のスピーカーからチャイム音が響き渡る。それは屋上も同様だった。

チャイムが鳴ったことに気がついた俺と箒は、

「箒、教室に戻るぞ。織斑先生に怒られる」

「それもそうだな。急ぐぞ、一夏」

「了解した」

お互いに少しだけ見つめあい、笑い合う。そして廊下を走って1年1組の教室に戻る。

一応ギリギリで教室に戻れた俺と箒だが、姉さんに廊下を走っているところを見られて出席簿で頭を殴られたのは全くの余談だ。

０２ー代表候補生とクラス代表（前書き）

さて、今回は短いです。数時間で執筆したので適当になっている部分があります。

それと、某理想郷様に投稿されているとあるＩＳの二次創作を参考にしているので、似ている部分があるかもしれないです。読者の皆様が嫌がるならすぐに修正しますので。

それではどうぞ！

０２　代表候補生とクラス代表

何だかんだで2時間目の授業も終了して、今は１０分間程度の休み時間となっている。
俺は箒に話しかけようと思い窓側の最前列にある箒の席を見たが、箒は既に席に居なかった。おそらく水道に行ったのかもしれない。
ちなみに授業はついていけた。というか、束に大体教えてもらっていたし元日本代表である姉さんにもＩＳのことは教わっている。だから基礎を覚える必要はない。……だが、基礎は大切だとは思っている。
ならどうしようか……そう思ったときだった。

「ちょっと、よろしくて？」
「何だ……？」

横からヨーロッパ人らしき声の少女が話しかけてきたので、俺はそちらのほうを向く。
俺に話しかけた相手は、薄い金髪を縦ロールにして、サファイアブルーの瞳がこちらを見据えている。服はもちろんＩＳ学園のカスタム制服を着用している。その少女は胸を張ってこちらを見下しているような姿勢でいる。
その少女はこちらを見据えて、

「聞いています？　返事はどうしましたの？」
「……すまない、少しボーっとしていた。それにしても代表候補生が俺に話しかけるとは思っていなかったからな、イギリスの代表候補生、セシリア・オルコット」
「あら、わたくしのことは知っていましたのね。男だからあまり期

待はしていませんでしたが……」
「クラスメイトの名前くらいは覚える」
……さて、原作ではこの後どうなった……？　確か挑発をされた後にクラス代表を賭けた決闘を申し込まれるはずだったな。まあ、原作知識はこの15年で薄れていって、もうほとんど覚えていないに等しいが。
その後、セシリア・オルコットは自分の自慢話を話し、俺はそれを聞き流している。正直これだけで時間を5分くらい潰せたから意外と楽だったな。
と、ここで自慢話も終了した。俺は興味なかったからスルーしたが。

「男にしては期待できそうですわね」
「そうか」
「ふん、何ですのその返事は。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ。ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一試験官を倒したエリート中のエリートですから」
入試で唯一試験官を倒す……そういえばそんなのをやらされた覚えが――。

「悪いが、試験官は俺も倒した」
「は……？」
「普通に接近戦に持ち込んでシールドエネルギーを0にしただけだが」
俺がそう言うと周りからは「それでも試験官を倒すなんて……織

斑くんって実は強いのかも」、「何か武術でもやってたのかな？」と囁かれた。武術はやっていないが、自力で技術を会得したり姉さんにしごかれたんだが。
するとセシリア・オルコットは俺が言った台詞で驚きを受けたのか、

「わ、たかくしだけが試験官を倒したと聞きましたが……？」
「女子の中では唯一、そういう意味なのではないか？」
「つ、つまりあなたも試験官を倒した、そういうことですの……！？」
「そういうことになる」
「あなた！　あなたも試験官を倒したって言うの！？」
「まずは落ち着け」
「こっ、これが落ち着いていられれ――――！」

キーンコーンカーンコーン。
セシリア・オルコットが叫ぼうとしたのと同時に、教室に設置されているスピーカーからチャイムが鳴る。もう１０分が過ぎたのか……。
チャイムに台詞を邪魔されたセシリア・オルコットは狼狽しながら再び台詞を紡ぐ。

「っ……！　また後で来ますわ！　逃げないことね。よくって！？」

それだけ宣言すると、セシリア・オルコットは自分の席へと戻っていった。
……結局彼女は何がやりたかったのか、よくわからなかったな。
そういえば次の授業の準備をしていなかったな。俺はバッグから次の授業に必要なテキストやノート、筆記用具を取り出して姉さんや山田先生が教室に来るのを待っていた。

3時間目の授業が始まる。
この時間は、ＩＳの実践などで使用する予定の各種装備の特性について勉強するらしい。今のＩＳの主流装備はアサルトライフルやマシンガンなどの実弾装備。一応レーザーガンやビームライフルの開発はアメリカや欧州（ヨーロッパ）で進められているらしいが、使用が確認されているのはイギリスの第3世代ＩＳ、『ブルー・ティアーズ』のビットとレーザーライフルだけだ。
まあ、「世界が変革した日（ブレイク・ザ・ワールド）」で、０ガンダムが使用したビームガンが初だが。
と、俺がそんなことを考えていたとき、姉さんが授業の話から脱線し、別の話をする。
「その前に、再来週に行われるクラス対抗戦（リーグマッチ）に出る代表者を決めないといけないな」
クラス代表者を決める……ああ、セシリア・オルコットと決闘することになる原因のアレか。
「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会の会議への出席……まあ、学級委員長やクラス長のようなものだ。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。1度決まると1年間変更はないからそのつもりでいろ」

姉さんの台詞が終わり、教室中がざわめく。それはそうだろうな……クラス代表なんて面倒くさい、誰もがそう思っているだろうしな。

「さて、自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

「はいっ。私、織斑くんを推薦します！」

「あ、私も賛成です」

……推薦されたか……。どうせ物珍しいから広告塔に持ち上げられたんだろうが。

ざっと周りを見てみると、俺以外に推薦されてはいなく、自己推薦をする女子もいない。このまま誰かが推薦しない限りはこのままだろうな。

「織斑のほかにはいないのか？　いないのなら無投票当選だぞ」

と、姉さんが話しているとき、窓側の席から視線を感じた。――箒だ。

箒は「勝手に投票されたが……いいのか？」とアイコンタクトで話して来た。俺は軽くうなずいて肯定する。

そんなときだった。

デスクを両手で思い切り叩きつけながらセシリア・オルコットが立ち上がる。

「待ってください！　納得いきませんわ！」

……はぁ、面倒なことになりそうだな。

心の中でため息をついた俺は、次々と放たれるセシリア・オルコットの台詞を聞くことにする。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえと仰るのですか！？」

ここで一旦息を切らせたセシリア・オルコットは息を吸い、再び言葉を紡ぐ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然ですわ。それを、物珍しいからと言う理由で極東のサルにされては困ります！　わたくしはこのような島国まで愛せすぎ術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

……日本人がいる中でよくそんなことが言えるな。逆に感心するぞ。あそこまで言うと日本人に軽蔑の眼差しで自分を見てください、そう言っているようなものだ。天然なのか？　いや、それはないか。それにしても、精神がよほど図太いらしいな。ああいう態度はいつか自分の身を滅ぼすんじゃないか？

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！　大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で——」

そこまで言うのか……なら、

「セシリア・オルコット、どうしてそこまで言うんだ？　その発現は日本人に対して自分を軽蔑の眼差しで見てください、そう言っているようなものだぞ？」

「な……ッ！？」

その後、俺は正直に自分の思っていることをセシリア・オルコットに対して質問した。周りの女子が何故かワナワナしているが気にしない。

とりあえず気になったことは全部言い終える。するとセシリア・オルコットは肩を震わせて、

「あ、あなた、わたくしを侮辱していますの！？」

「いや、そういうわけではないが……」

「け、けけっ、決闘ですわ、織斑一夏！！」

どうしてこうなった？　俺がバカ正直に質問したからなのか？

ともかく、セシリア・オルコットが喋り、俺はそのまま沈黙していると姉さんが話を纏める。決闘するのは決定事項のようだ……。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は1週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業をはじめる」

……仕方ない。対話で解決したいところだが決まったことには従うしかないな。

で、授業が始まったため俺はテキストを開く。

０２ー代表候補生とクラス代表（後書き）

短かったですが、どうでしたか？　よければ感想をください。

０３－部屋割りと義姉弟の会話（前書き）

どうも、キラーです。

今回も某理想郷にあるとあるＩＳの作品を参考に執筆しました。たぶん、かなり似ているかもしれません。「パクリだ」と言われた場合はすぐに削除、もしくはその部分を変更させていただきます。

０３－部屋割りと義姉弟の会話

　ＩＳ学園の初日の授業なども全て終わり、俺、織斑一夏は放課後であるこの時間に教室に残っていた。デスクに備え付けられている新型のコンピューターでＩＳ学園の見取り図を見ているからだ。
　ＩＳ学園にある勉強机（デスク）は空間モニターが展開してキーボードはタッチパネル式になっている。
　まあ、それ以外にも残っている理由はあるが……。
　そろそろ教室から出て家に帰るか、そう思った俺は空間モニターを消してデスクのパソコン機能を停止させてワンショルダーバッグを手に持って教室を出ようとする。
　イスから立って教室を出ようとしたとき、何かの資料を持った山田先生が教室に入ってきた。

「あっ、織斑くん。まだ教室に残っていたんですね」
「はい、山田先生。……それで、何か俺に用事でもあるんですか？」
「そうです。実はですね、寮の部屋が決まりましたよ」

　寮の部屋が決まった……？　俺は約１週間くらいの間は自宅からＩＳ学園に通え、と政府から通達が来ているはずだが……。
　俺がそんなことを考えていると、山田先生はポケットから寮の部屋番号が記されたメモ用紙とメモ用紙に記されている番号が刻まれているキーを取り出して、それが俺に手渡される。
　……おそらく、強引に寮に入れることを決定したみたいだな。自惚れるわけじゃないが、俺は世界で唯一ＩＳを使える男だからな。

「それで、寮のことなんですけど……急に決まったことなので個室が用意できなかったんです。あ、でも、１ヶ月も経てば個室が確保

できるのでそれまで我慢してください」
「了解しました。そういえば寮には俺の荷物は届いているんですか？　急だから何も用意していないんですが……」
「荷物は私が手配しておいたぞ、織斑。ありがたく思え」

と、ここで姉さん……もとい織斑先生が教室に入ってきた。

「手間を掛けさせてすいません」
「別に構わないさ。携帯端末はお前が持っているだろうからいいとして、他には着替えとお前のノートパソコン、その充電器くらいしか持ってきていない」

……大雑把な選択だな。まあ、俺の部屋は生活に必要なものくらいしか揃っていないから仕方ないが。

「じゃあ織斑くん、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時の間、寮の1年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間は違いますけど……えっと、その、織斑くんは今のところ使えません」
「わかりました。それじゃあ寮に行くので失礼します」
「そうだ、織斑。夕食後ならいつでもいい、寮長室に来い」
「了解」

そう言って、俺は教室を出て行く。
教室を出た後は学園内にある自動販売機でお茶を買った後、真っ直ぐ寮に向かって歩き出した。

「ここが１０２５号室が……」

なんだかんだで寮についた俺は自分の部屋となる１０２５号室のドアを探して、２分程度で発見できた。
多分同室になった生徒もいる可能性があるので、俺はドアを軽く2回ノックする。
ノックしても反応はなし、か……。それでも構わないな。俺はポケットから部屋の鍵を取り出してロックを解除、ドアを開けて部屋に入る。
部屋に入りドアを閉めて部屋を見る。……部屋には質のいい大きめのベッドが２つあり、茶色が掛かった白の壁紙やデスクトップ型のパソコンが２台ある机とイスに地デジ対応の最新薄型テレビがあり、内装がいいホテルの１室のように思える。
と、俺が今いるところの手前に俺宛のダンボールがあった。中身は姉さんが揃えたであろう俺の部屋にあったノートパソコンとその充電器に下着やシャツなど、着替えが入っていた。

「とりあえず姉さんには感謝だな……。さて、片付けるか」

そう言ってワンショルダーバッグを床に置いたときだった。
シャワールームと思われるところのドアから凛々しい感じの女子の声が聞こえた。……しかも今日６年ぶりに聞いた声だ。

「誰かいるのか？」

……これは何か言うべきなのか……？　そうは言っても何を言うべきだ……？　とりあえず俺はシャワールームの方を向く。

「ああ、同室になった者か。これから1年よろしく頼むぞ」

ガチャリ、とシャワールームを隔てるドアが開く。

ドアから出てきたのは――――。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之……」

「……箒……」

6年ぶりに再会した俺の幼馴染、箒のバスタオル姿だった。

バスタオルに包まれたその姿は箒の体を妖艶に見せるだけで、太腿のほうはシャワーのお陰か赤みが掛かっていて目を逸らすどころか無意識に注目していた。それ以上にバスタオル上部にある2つの双丘は押さえられている手で強調されていて、頬の赤みもあってか、俺にはエロく感じられた。

……ちなみに刹那・F・セイエイに似た思考回路でも俺は結局思春期男子だったようで、こういう思考が出てきた。

「いっ、い、いちか……？」

「あ、ああ……」

たった数文字の会話の後、俺と箒の顔はみるみる赤くなり……、

「きゃあああああっ！？」

「――――！？」

あぁっ、どうすればいいんだッ！？　くっ、冷静になれ織斑一夏。

この状況から脱出するには……。

「箒！」
「な、何だ！？」
「その……すまなかった！」
「え……？」

俺は床に手を付いて頭を下げる。いわゆる土下座の体制で箒に謝罪する。
箒は何が何だかわかっていないようだがじょじょに冷静さを取り戻して俺に声を掛ける。……それで箒のスタイルがさらに強調されたのはまったくの余談だ。め、目のやり場に困る……。

「一夏……その、なんだ、頭を上げてくれ」
「だが、事故とはいえお前のバスタオル姿を見たんだぞ……？」
「事故だから仕方ないだろう。……それより、後ろ向いていてくれないか？　その……着替えるからな」
「りょ、了解した……」

俺は箒の頼みもあって――元々そのつもりだったが――後ろを向くことに。ちらりと放棄が竹刀や木刀が突き刺さっているバッグから服を取り出すところが見えたことはなんとも思わなかったが、その後に聞こえる衣擦れの音がちょっと、というかかなりエロい。
……無心になるんだ、俺。ちゃんと気持ちを落ち着けろ。
それから数分経ち、衣擦れの音がようやく止まったところで箒が俺に声を掛けてくる。

「もういいぞ、一夏」
「わ、わかった」

そう言われて俺は前を向く。そこには、紺色の剣道着を着ている箒がいた。……それにしても何故剣道着なんだ？

そう思っているうちに時間はどんどん過ぎていき、いつのまにか5分強も経っていた。
この沈黙に耐えかねた俺は何かを話そうと思ったとき、箒が先に口を開いた。
「と、とりあえず同室になったのだからいろいろとルールを決めなければ」
「それもそうだな……。まずはシャワーの時間だが、箒はどうする？」
「そうだな……悪いが先に使わせてもらってもいいか？」
「問題ない。なら俺は後だな」

その後はその他のルールを決めて食堂が開く時間までお互いが離れていた間、何があったのかなどを話していた。俺は箒が転校して行った後、中国から新しい転校生が来たことなどを、箒は転校している間に束からの連絡や他の友人たちからの手紙を貰ったことが嬉しかったなど、いろんなことを話した。
……この世界の箒は束に確執を持っていないみたいだな。姉妹が仲が良いなら原作が少し変わるかもしれないが。いや、俺がいる時点で変化しているか。

夕食を食べ終えた俺は部屋に戻らず箒と分かれて寮長室へ行くことにした。ちなみに夕食は箒がさば味噌定食、俺はチャーシュー麺とカツカレーを食べた。

今は７時過ぎだから姉さんも部屋にいるだろうな……。
ともかく寮長室の前に来た俺は目の前にある木製のドアを２回ノックすることに。それから数秒後、姉さんがドア越しに「入れ」と言って来たので俺はドアノブに手を掛ける。

「失礼します」
「お、来たか。適当に座れ、一夏」
「わかった、姉さん」

そう言われて俺はドアの少し手前に置かれているイスに座る。
で、姉さんが俺のことを苗字じゃなく名前で呼んだのは、「ここではプライベートだ」……おそらくそういう意味だろう。
それにしても、姉さんの部屋はやっぱり汚いな……ベッドには脱いでそのままらしいワイシャツや下着が散乱していて、床には空になった缶ビールなどが捨てられている。……後で掃除するように言っておこう。もしくは俺が掃除しよう。それよりも姉さん、下着を出しっぱなしにするな！

「それで？　３時間目のあのときどうしてバカ正直にオルコットに自分の思ったことをぶちまけたんだ？」
「………すまない。一応断ろうとはしたが……」
「そういうことを聞いてるわけじゃないんだが……いや、もういい」

……なんかごめん、姉さん。

「まあいい。１週間後にはお前のＩＳ……いや、ガンダムが届く」

ガンダム、その単語を聞いた俺は内心驚いた。何故なら、ガンダムはＩＳが出た初頭、『白騎士』と呼ばれる当時最強だったＩＳとともに「世界が変革した日（ブレイク・ザ・ワールド）」で発射された約２０００発のミサイル

を駆逐し、ＩＳと言う存在を世界に知らしめた存在。場合によっては畏怖の対象とも言うべき存在だろう。
……『計画』のために束が開発して、俺が乗った最初のガンダム、『0ガンダム』はその1回しか世界の表舞台に登場していないが、1度ミサイルを全滅させた後にＩＳを鹵獲しようとした世界各国の最新鋭の戦闘機や巡洋艦をビームガンとビームサーベルだけで死者を出さずにほぼ全滅させたのだから。ほぼ、と言うのはそれ以外は『白騎士』が破壊したからだ。
そして、世界を変えるために作られたＧＮドライヴ搭載型兵器。
世界を、変革させるための。
ガンダムと白騎士が行った「世界が変革した日（ブレイク・ザ・ワールド）」はＩＳの驚異的な武力と制圧力を世界に見せ付けて紛争根絶を目標にした機体。
――そこまで考えていると、姉さんが話しかけてきた。

「どうした一夏？」
「すまない……『計画』について考えていた」
「『計画』、か……。第1段階は一応完了はしたな。ただ、第2段階は『ヴェーダ』がまだイノベイドを生み出していないから数年後になるだろうな」
「そうか……」

ただ、『計画』の第1段階で俺たちは世界を歪めてしまったのではないか？　と思うときがある。
ＩＳは女性しか使えないという理由だけで世界は女尊男卑が当たり前になってしまったし、そのお陰で一部の女性は『男は女の奴隷だ』、『女はＩＳを使えるから男よりも優秀だ』という概念が生まれてしまった。それで男性が世界に反旗を翻し、ガンダム００でいうカタロンのような組織を生み出してしまうかもしれない。
これが原因で戦争が起これば、ガンダムで武力による介入を行う。
でも、それで本当に良いのか？

ただ破壊するだけで本当に『計画』を成し遂げられるのか？
それだけが、俺の思考に付きまとっていた……。
すると、姉さんが俺に近づいてきて、俺の身体を抱きしめる。

「一夏、何を考えているのかは知らないが、あまり溜め込むなよ。私はお前の姉なんだ、こういうときくらい私を頼れ」
「……姉さん……、あぁ。今は相談できないかもしれないが、そういうときは頼るよ」
「昔から私に甘えないお前が言うことか？」
「ふっ……そうかもしれないな」

とにかく、今はセシリア・オルコットとの決闘を心配するべきだな。万が一、負ける場合があるからな。……一応自惚れているわけじゃない。
さて、それよりも……。

「なぁ姉さん、この部屋の有様は何なんだ？」
「いや、だな一夏。これはその……」
「……御託はいい。部屋を片付けるから姉さんも手伝ってくれ」
「何故私が」
「将来結婚する相手にズボラと言われても知らないぞ」

姉さんにも片付けさせようと言ったこの台詞の後、姉さんがじっと俺のことを直視してくる。……一体何なんだ？
その直後、姉さんの顔が真っ赤になる。原因の感情は……見た限りは羞恥のようだ。でも何で俺の事を見ただけで？　もしかして、姉さんは俺のこと――――いや、姉弟だから違うだろうな。でも一応義理だし……。
そう考えていると姉さんが、

「一夏、さっそく始めるぞ」
　と言ってどこからかゴミ袋を取り出す。やる気になってくれたのはいいことだ。これで掃除も速く終わるかもな。
　そう思っているうちに部屋の掃除は始まり、掃除は8時前まで続いた。

　一夏が自室に戻り、千冬はペットボトルの容器に入っている水を半分くらい飲んで、一夏に言われたことを思い出す。
　――将来結婚する相手にズボラと言われても知らないぞ。
　その台詞で千冬は目の前にいる一夏を見て、何故か一夏との新婚生活を想像していた。
　ようするに、一夏にズボラと言われたくないから掃除を始めたのだ。……やっぱり千冬は隠れブラコンだった。
　他にも考えていることはあったが、そのほとんどが一夏のことで埋め尽くされていた。
　そして千冬はどうしてこんなにも一夏のことを意識してしまうのか、その答えを見つけ出せないでいた。だが、答えはすぐに見つかった。
　――織斑千冬は、織斑一夏のことが好きだ。
　自覚すると自分の頬が厚くなるのを感じる。
　とりあえず千冬は自分の気持ちを落ち着けると、僅かに微笑み、独語する。

「あいつは昔から女をすぐ惚れさせるからな……ま、私もその1人だが。一夏、お前は必ず私が奪うからな」

千冬は義理の弟をもう1度思い出すと頬が紅潮する感覚を感じて、握っていたペットボトルの水を少しだけ飲んだ。

――クラス代表決定戦まであと1週間。

０３－部屋割りと義姉弟の会話（後書き）

うーん、最後のほうはちょっとグダグダになった気がしますね……。

感想、および誤字脱字の報告など、お待ちしています。

『計画』についてはまだネタばらしはしません。ほとんどの人は『計画』の内容はわかってらっしゃると思いますがねｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4913z/

Infinite Stratos 00

2011年12月30日15時51分発行